

文 法 (史的研究)

小 川 栄 一

1. 理論と実証

2003年度春季大会シンポジウムが「日本語史研究の将来」というテーマで行われた。その副題「理論と実証との接点」は文法史の課題をよく表している。司会をつとめた金水敏は「日本語文法の歴史的研究における理論と記述」(『日本語文法』3-1, 2002.9)において、文法史研究における理論化の遅れを、学界のいわば体質に属することがらまで取り上げて厳しく批判する。歴史的研究は現代語研究の場合と違って、史料の発掘や本文校訂などの文献学的作業から始まって、実証を一つ一つ積み重ねなければならない。理論化に向かって実証という重いハンディを背負うものといえよう。しかし、事態は前向きにとらえよう。いま大切なのはどのような理論をうち立てるべきか模索することである。その理論は、特定の視点から文法史を広く見渡すことはもちろん、言語の使用者であり生産者である「人間」との関わりを視野に含め、言語変化の背景にあった人間のコミュニケーション活動を想定するものであることが望ましい。

ここで私見を述べると、言語や文法の構造とは言語を用いる人間の必要に応じて形成されたものにほかならない。言語変化も要は人間の変化に起因する。すなわち、社会・文化の歴史的發展によって、言語体系において新たに必要となった伝達機能を獲得するために、機能負担の大きい単位が分化し、小さいものが統合・消失した結果と考えられる。その一つの例として近年議論の盛んな係り結びを取り上げよう。私見によれば、係り結びとは情報構造の形成に関連した呼応現象であって、係助詞(ハ・モを除く)による焦点の卓立(=係り)に呼応した文末表現の変異(=結び)と考えられる。ところが、中世以降の社会的發展によって言語コミュニケーションのあり方が進化し、表現のしかたよりも情報の内容に重きが置かれるようになると、焦点が何かは文脈やプロミネンスによっても定まることであるし、係助詞によって焦点を卓立する意義が失われ、多くの係助詞が消失した結果、係り結びは崩壊に向かったものであろう。

現在における文法史研究の目標は、実証によって多くの文法的事象を明らかにし、人間や言語コミュニケーションとの関わりを視野に入れて統一的な理論を構築することである。以下、理論と実証の観点から2002・2003年における文法史研究(時代の範囲は上代から近世までとする)について展望しよう。

2. 活用に関する研究

この分野では理論・実証ともに着実な進展があった。活用の種類の性格についてユニークな見方を提示したのが、坪井美樹「“軟らかい”活用と“硬い”活用」(『筑波日本語研究』7, 2002.8)である。助動詞ウからヨウの分出, 完了リ・タリの変遷, 動詞連用形音便の発生などの過程において語尾音節が保存されるか否かに着目して, 「母音変化型活用」(四[五]段活用)は後接する接辞類と融合する「軟らかい」活用, 「語尾添加型活用」(一・二段活用)は後接する接辞類と融合しようとし「硬い」活用と捉えている。活用の類別を共時的体系ではなく通時的变化に基づいて行った点が新しい。竹内史郎「古代語形容詞の活用語尾——動詞活用語尾形態への仮託——」(大阪大『語文』78, 2002.5)は, 古代語の形容詞活用語尾には, 本来的なク・シ・キ・サと, 動詞活用語尾形態に仮託したケ・ケレ・ミとの2タイプ存在するという新しい見方を示す。林浩恵「形容詞語幹の用法の違例」(『万葉』185, 2003.9)は, 形容詞語幹用法の違例の2型, 語基シ型ク活(ウマ酒・ウマシ小汀など)と語基型シク活(アラタ世・タハ言など)とは同列に捉えられないことなど犀利な論を展開する。坂詰力治の研究も興味深い。「中世における助動詞の接続用法に関する一考察——終止形接続の助動詞「まじ」「らん」「べし」を中心に——」(東洋大『文学論叢』76, 2002.3)では, 虎明本狂言に見られる「助動詞の接続用法」の変化(「まじ」「まい」の一・二段・サ変活用の未然形・連体形接続, 「らん」「らう」の二段活用連体形接続, 「べし」「べい」の一・二段活用未然形接続など)が鎌倉の軍記や説話に散見すると指摘して, 発生の原因を「見ん」「見よう」「見えぬ」などとの類推によって説明する。近世語に関しては村上謙の精力的研究があった。「近世後期以降の上方における形容詞ウ音便の変化形について」(『国語と国文学』79-3, 2002.3)では, 形容詞シク活用ウ音便が変化した「シ形」は近世前期から, 「シー形」, 「シーテ形」は寛政頃から見ると指摘し, 「近世後期上方における形容詞ウ音便の短呼形について」(『国語国文』72-7, 2003.7)では, 形容詞ウ音便の短呼は下接語を熟合する働きをもつと指摘する。村上には命令表現「動詞連用形+や」の起源を論じた, 「近世後期上方における「動詞連用形+や」について——運用形命令法と助動詞ヤルとの関連——」(『国語国文』71-6, 2002.6)もある。

3. 文の構造に関する研究 (係り結びを含む)

この分野でも新たな視点による研究が多かった。釘貫亨「奈良時代語の述語状態化標識として成立したり, タリ, ナリ」(『国語学』54-4, 2003.10)は意欲的である。奈良時代, 連体修飾「ル」「タル」を含む句では格関係を離脱して状態性を表示した例が多いことから, 連体修飾に密集するリ・タリ・ナリは述語の意味を状態表示する形容詞の用法として成立したと考える。吉田茂晃「古代語の連体法述語——『落窪物語』を例として——」(天理大『山辺道』46, 2002.3)は, 古代語の連体法述語において律儀に助動詞的要素が

使用されることを、モダリティ形式の生起と捉える見方をふまえながら、内容事態の現実世界への位置づけを文末述語に委ねず独自に行うものとする。この分野の近世でも村上謙の活躍が目立った。「近世後期上方における連用形命令法の出現について」(『国語学』54-2, 2003.4)では、連用形命令法が遊里という特殊社会の階層状況を言語表現に反映させるシステムとして作り出された変化形と論じ、「近世後期上方における連用形禁止法の出現について」(『国語と国文学』80-12, 2003.12)では、連用形禁止法(連用形命令法+禁止の終助詞ナ)も同じく宝暦以降の上方遊里に端を発したもので、連用形接続という見方を否定する。青木博史には、「句の包摂」現象の起きる条件を考察した「古代語における「句の包摂」について」(『国語国文』71-7, 2002.7)、「～サニ」構文の成立期から現代の消滅に至るまでを「包摂」の観点から考察した、「『～サニ』構文の史的展開」(『日本語文法』3-1, 2003.3)がある。このほか、「ーラーミ」語法を、動作主体に形式的に指示の他動詞をとらせて限定的な対象の状態を表すものと捉えた、村島祥子「上代の「ーラーミ」語法について」(『国語と国文学』79-2, 2002.2)、中古の異主語動詞接続(「他動詞+出づ」など)が構文的能格性を背景に生み出されたことを論じた百留康晴「複合動詞と動詞接続——「～出づ」を中心に——」(『国語と国文学』80-8, 2003.8)、中古の仮名文学作品における命令・勧誘表現の体系を考察した、川上徳明「命令・勧誘表現の四段型体系」(札幌大『比較文化論叢』10, 2002.9)などが印象に残った。また、佐佐木隆『上代語構文論』(武蔵野書院, 2003.9)は、万葉の解釈や語彙に関する論を中心とするが、第V部「已然形の用法」で無助詞の已然形と「已然形+か(ノかも)」の用法が論じられている。

係り結び(係助詞を含む)については活発な議論が展開された。半藤英明から2冊の著書『係結びと係助詞「こそ」構文の歴史と用法』(大学教育出版, 2003.9)と『係助詞と係結びの本質』(新典社, 2003.9)が出た。この中核をなす2本の論文を紹介しよう。「係助詞の体系と歴史——「か・や」構文の再検討を軸に——」(『国語国文』71-9, 2002.9)では、係り結びの役割は「取り立て」と「強調」の二面性を持つ構文法を作ることととらえ、係り結びの役割と文意とを切り離して把握すべきことを論じ、「係結び論の再構築」(『国語国文』72-7, 2003.7)では、「ハ」(題述構文)「モ」(類似)「コソ」(対比)の存在意義は認められるが、「その他の係助詞」については具体的な意味に乏しく、そのために係り結びが形骸化・消滅したと考える。尾上圭介「係助詞の二種」(『国語と国文学』79-8, 2002.8)は、係助詞には結合の承認の仕方にかかわる「ハ」「モ」「ヤ」と意味を加えるだけの「ゾ」「カ」とがあり、異質な両者が共に係助詞とみなされるのは形態上の呼応現象ではなく、別の意味の係り結びを構成するからと述べる。尾上の論は係り結びを形態的呼応に限らない見方をとるものである。さらに、船城俊太郎「でさのよツイスト——<かかりむすび>の再生——」(新潟大『人文科学研究』112, 2003.8)では、係り結びの本質を「二分結合」と捉え、文中の間投助詞と文末の終助詞との呼応になぞらえて、「二

分」の力が強い「ゾ」「ナム」「コソ」には呼応があり、それが強くない「ハ」は呼応しないと述べる。係り結びの崩壊に関しては小池清治『日本語は悪魔の言語か?—ことばに関する十の話—』(角川書店, 2003.6)の論がある。その起因となった連体形の終止形同化の外的要因として、院政期以降、東日本方言話者が大量に都に流入したためにアクセントの相違によって支えられていた四段活用の終止形と連体形との区別が混乱したとする説である。東日本方言のアクセント史料の欠如からこの説の妥当性を確認できないが、言語変化を人間の動きに関連づけようとする立場には賛同する。山田昌裕「名詞文「AガBダ」型の発生とその拡大の様相——主格表示「ガ」と係助詞「ゾ」「コソ」との関連性——」(『国語学』54-2, 2003.4)は、名詞文「AガBダ」型は係助詞が未分化的に持っていた意味・機能を主格表示「ガ」と他成分との分化によって表現するようになったと述べる。このように、係り結びの研究は実証の段階を終えて、その本質をいかに捉えるかという理論の段階に進んでいる。前掲金水敏の論文にも係り結びの問題点の整理と外国人研究者などによるさまざまなアプローチの紹介とがある。日本語文法史の理論を構築する上で係り結びは最重要のテーマとなりそうである。

4. テンス・アスペクトおよびモダリティに関する研究

この分野も理論と実証にわたって活発であった。井島正博「中古語過去助動詞の機能」(『国語と国文学』79-1, 2002.1)は「語り」の視点から「話題時」「表現時」を区別し、「ケリ」は「相対時過去」,「キ」は「話題時過去」ないし「表現時過去」に用いられるものと述べる。この論を発展させた「中古和文の表現類型」(『日本語文法』2-1, 2002.3)では、中古和文の表現を時制の観点から3種の類型に分類して階層化し、各作品の表現をこの中に位置づけている。次にアスペクト研究の根幹にかかわる論として、近藤明は「アスペクトから見た動詞「生ク」(四段・上二)」(『金沢大学教育学部紀要』52, 2003.2)において、古語のアスペクトを論ずるには動詞一つ一つのアスペクト素性の点検が必要なことを主張し、「助動詞「リ・タリ」に否定辞が下接する場合」(『国語学研究』42, 2003.3)では、「リ・タリ」が否定辞を下接する場合の上接動詞を類別する。鈴木泰「古代日本語における完成相非過去形(ツ・ヌ形)の意味」(『国語と国文学』79-8, 2002.8)は、「ヌ形」では「パーフェクトの意味」「潜在の意味」「具体的-事実の意味」の「発話時以後」の運動,「ツ形」では「具体的-事実の意味」の「発話時以前」の運動と「総計の意味」が目立つことを指摘して、ツ・ヌ形のふるまいとロシア語の完成相との類似を示唆する。現代オランダ語と対照した、鷲尾龍一「上代日本語における助動詞選択の問題——西欧諸語との比較から見えてくるもの——」(『日本語文法』2-1, 2002.3)では、他動詞と意志的行為を表す自動詞は hebben/ツ, 状態変化を表す自動詞は zijn/ヌを選択するなど,「ツ」「ヌ」の使い分けが西欧諸語の「助動詞選択」と同一の現象であるという、きわめて興味深い事実を主張する。

中世以降のアスペクト表現では「タ」の役割が重要になるが、終止法によって状態を表す「～タ」について、福嶋健伸「中世末期日本語の～タについて——終止法で状態を表している場合を中心に——」（『国語国文』71-8, 2002.8）は、「～タ」は存在状態から遠い状態を表すこと、同じく「中世末期日本語の～タにおける主格名詞の制限について——終止法で状態を表している場合を中心に——」（『筑波日本語研究』7, 2002.8）は、「～タ」の主格には有情物と非情物があるが、「～テイル」・「～テオル」には非情物の例がないことを述べる。同じく「タ」を扱った山田潔「『長崎版日葡辞書』における「た」の用法」（『国語国文』72-12, 2003.12）では、平安・鎌倉では主として「存続」を表した「タリ」が、室町末期には文末終止において「過去」用法に傾いたことを述べる。坂梨隆三「『浮世床』『浮世風呂』のテルとテイル」（『国語と国文学』79-8, 2002.8）は、江戸語においてテイルからテルへ変化した条件として音節数との関連を指摘して、テに続く形が1音節・3音節ではテイル、2音節ではテルが多いことを証明する。このほか、終了段階のアスペクトを表す「はつ」（複合動詞の後項要素）に完全性と時間性の用法があると指摘した、成允廷「古代語の終了段階を表す複合動詞の後項要素についての考察——『源氏物語』の「はつ」、『今昔物語集』の「をはる」を中心に——」（お茶の水女子大『国文』99, 2003.7）、タクシスの観点からタリ、リ形のアスペクトの意味を論じた、鈴木徳子「地の文におけるアスペクト形式タリ、リをめぐって——タクシス（時間的順序性）の観点から——」（同『国文』98, 2002.12）、複合動詞「～しそむ」の表すアスペクトの用法を「具体的・進展的」「大規模・進展的」「大規模・持続的」の3種に分類した、酒匂志野「源氏物語における複合動詞「～しそむ」の意味」（同『国文』97, 2002.7）など、多くのすぐれた論があった。

モダリティに関する著書では、高山善行『日本語モダリティの史的研究』（ひつじ書房, 2002.2）は古典語を中心にモダリティ表現の体系化を試みた意欲作である。山口堯二『助動詞史を探る』（和泉書院, 2003.9）においても、「はずだ」の成立、勧誘表現の通時的変化、「である」の形成など、モダリティに関する表現の史の変遷についてそれぞれ章を立てて考察している。論文では、虎明本狂言における「動詞+ヌカ」は行為要求表現として固定化されていないことを述べた、永田里美「狂言台本虎明本における否定疑問文「動詞+ヌカ」——行為要求表現という観点から——」（『筑波日本語研究』7, 2002.8）、近世江戸語の「ソウダ」と「ヨウダ」の用法を考察した、岡部嘉幸「江戸語におけるソウダとヨウダ——推定表現の場合を中心に——」（『国語と国文学』79-10, 2002.10）、江戸語の「動詞連用形+は+どうだ」を考察した、久保田篤「江戸語における動詞連用形の一用法について」（『国語と国文学』79-11, 2002.11）、否定条件先行の二重否定表現（ナイト…ナイ、ナクテハ…ナイ、ナケレバ…ナイなど）の江戸から近・現代までを記述した、田中章夫「否定条件の先行する二重否定形の動向——江戸語資料を中心として——」（『国語と国文学』79-11, 2002.11）などがすぐれている。『日葡辞書』のポルトガル語訳では、「Ser」が述定「～デアル」, 「Estar」が装定「～ニアル」に対応していると述べた、山田潔

『長崎版日葡辞書』の述定・装定表現——Ser と Estar——』（『国語国文』71-3, 2002.3）も興味深かった。

5. 助詞に関する研究

助詞（これまでに扱った係助詞を除く）については中近世を中心に精緻な実証研究が多かった。安田章「格助詞の潜在」（『国語国文』72-4, 2003.4）は、中世語における格助詞の欠落現象「ワレラ#」を「ワレラガ」から「ワレラノ」への中間過程に位置づけ、『捷解新語』の「ワレラ#」を著者康遇聖の日本語の稚拙さによるとした従来説を否定する。小林賢次「順接の接続助詞「ト」再考——狂言台本にみる近代語条件表現の流れ——」（『国語と国文学』79-11, 2002.11）は、狂言台本にみられる順接の接続助詞「ト」の発達状況を詳細に調査して、同時性・即時性の表現を起点として、次第に順接条件表現一般の形式としての機能を強めたことを論ずる。田中敏生には「バカリ」が単限定から複限定に移る過程を明らかにした、「円朝口演速記における副助詞「バカリ」の限定用法——単限定・複限定のありようを中心に——」（『四国大学紀要』17, 2002.3）、「一九『東海道中膝栗毛』における副助詞「バカリ」の限定用法——単限定・複限定のありようを中心に——」（同 18, 2002.12）、「三馬『浮世風呂』『浮世床』における副助詞「バカリ」の限定用法——単限定・複限定のありようを中心に——」（同 19, 2003.3）などの論がある。

このほか、『天草本平家物語』などを史料に時間的関係の複文の表現として「テヨリ」が「以来」、「テカラ」が「継起」という傾向を指摘した、小川志乃「テヨリとテカラの意味的相違に関する史的 research」（熊本大『国語国文学研究』38, 2003.3）, 狂言記の主語尊敬「ガ」は日常的な俗っぽい表現、「ノ」は改まった正当な表現と述べる、山田昌裕「狂言記から——仮想的追体験」（『国文学』48-4, 2003.3）, 「ワナ」・「ワネ」が文の内容を聞き手に納得させる表現であると述べる、中野伸彦「江戸語の終助詞と感情——「わな」・「わね」の表すもの——」（『日本語学』22-1, 2003.1）, 準体助詞「ノ」の発達とともに、「ニ」が衰退する変化を明らかにした、宮内佐夜香「江戸後期から明治初期における接続助詞ニ・ノニの消長」（東京都立大『日本語研究』23, 2003.4）, 近世中後期、形容詞・打消の助動詞を受ける条件句が依然として「連用形+ハ」が基本であった理由を考察した、矢島正浩「形容詞・打消の助動詞を受ける条件句——近世中期のあり方をめぐって——」（愛知教育大『国語国文学報』60, 2002.3）など、すぐれた論があった。

助詞相当句に関しては、李英児『捷解新語』から見る原因・理由を表す条件句——「ホドニ」の改修状況を中心として——」（『国語学』54-4, 2003.10）は、『捷解新語』の原刊本と改修本とを比較し、原因・理由「ホドニ」から「ニヨッテ」への勢力交替について論じ、矢島正浩「近世中期上方語における原因・理由表現」（『国語と国文学』80-7, 2003.7）は、近世中期上方語における原因・理由表現「ニヨッテ」・「ユエ（ニ）」は「対象型」中心、「ホドニ」は「発話主体型」中心、「已然形+バ」は両用であると述べる。

6. これ以外のテーマに関する研究

副詞に関する研究では、古代から現代までを見渡したものや、中国語との比較など、広い視野に立ったものが多かった。濱田敦・井手至・塚原鉄雄『国語副詞の史的研究増補版』（新典社、2003）は初版（1991刊）に吉井健「「とても」の語史」を増補したものの。論文では、陳述副詞化した後に再び擬態語となった例「つやつや（と）」を指摘した、田和真紀子「中世において否定の陳述副詞として用いられた「つやつや（と）」の語史——副詞の機能変化に関する一考察——」（東京都立大『日本語研究』22, 2002.4）、「もう」の2類「もはや、すでに」と「この上になお、さらに」とでは別の出自をもつことを述べた、加波尚子「副詞「もう」の語史」（『日本語文法』3-2, 2003.9）、古代中国語の時間副詞「既」が漢文訓読を媒介にして「すでに」の意味・用法に影響したことを明らかにした、山崎貞子「古代語の時間副詞「すでに」の考察——古代中国語「既」と比較して——」（お茶の水女子大『国文』99, 2003.7）などが興味深かった。拙稿「和漢融合における表現システムの機能進化」（福井大『国語国文学』41, 2002.3）は、程度の甚大さを表す副詞の体系の機能進化を、中世語のコミュニケーション拡大と関連づけて論じている。

指示詞・人称詞を扱った著書に、李長波『日本語指示体系の歴史』（京都大学学術出版会、2002.5）がある。日本語の指示体系は上代以来二人称・三人称が未分化であったが、近世後期江戸語においてその区別が確立したことを明らかにした力作である。岡崎友子には、古代語の指示副詞・指示代名詞をその用法（照応・直示・観念用法）によって整然と体系化できると述べた、「指示副詞の歴史的变化について——サ系列・ソ系を中心に——」（『国語学』53-3, 2002.7）、古代語の「カク」・「サ（系列）」には使用場面の制約がなく、広く様々な対象を示したことを論じた、「現代語・古代語の指示副詞をめぐって」（『日本語文法』3-2, 2003.9）がある。

待遇表現を扱った著書では、杉崎夏夫『後期江戸語の待遇表現』（おうふう、2003.9）がある。滑稽本、人情本における対称代名詞を中心に、後期江戸語の待遇表現体系を明らかにした精緻な研究である。北原保雄監修・菊地康人編『朝倉日本語講座8 敬語』（朝倉書店、2003.3）には敬語史に関するものとして、辛島美絵「文献資料から敬語の何が読みとれて、何が読みとれないか」、森野崇「中古の共時態としての敬語、動態としての敬語」、森山由紀子「謙讓語から見た敬語史——「尊者定位」から「自己定位」へ——」、西田直敏「敬語史と現代敬語——付 敬語研究小史——」などの論がある。藁谷隆純「『宇治拾遺物語』の卑罵表現の一考察」（創価大『日本語日本文学』13, 2003.3）は、『宇治拾遺物語』の卑罵表現から読み取れる人間対人間の心理・感情を論じている。白井純「キリシタン宗教文献に於ける使役と尊敬——(サ)セ給フ・(サ)セラル表現について——」（『国語と国文学』80-6, 2003.6）は、キリシタン宗教文献では正確な伝達を重視して「使役+尊敬」は「(サ)セ給フ」、尊敬は「給フ」に統一されたことを指摘する。これを「簡約日本

語」のさきがけと捉えればおもしろい。

漢文訓読の語法に関して、関一雄「「ずして」の意味——主として平安和文の用例を通しての分析——」(梅光女学院大『日本文学研究』37, 2002.3)は、「ズシテ」が漢文訓読で多用されたのは、「ズナシテ」と分析されることが正確さの期待される読解に適していたためと考える。位相対立語の違いを機能的に捉え、従来の位相論に一石を投ずるものである。齋藤文俊「江戸・明治期における「不可(以)不」の訓読法——「ズンパアルベカラズ」と「ザルベカラズ」——」(『国語と国文学』79-11, 2002.11)は、江戸以降における訓読語法の交替を論じている。漢文訓読によって生じた再帰格名詞述語文について楊金萍の視野の広い研究があった。上代語の用法と古代中国語の用法と比較した「上代語における再帰格名詞述語文——『古事記』『風土記』『万葉集』の用例を通して——」(お茶の水女子大『国文』97, 2002.7), 「『今昔物語集』における再帰格名詞述語文——『天竺部』『震旦部』の用例を通して——」(『国語学』53-3, 2002.7), 近世初期仮名法語の用法を扱った「仮名法語における再帰格名詞述語文」(同『国文』98, 2002.12)などである。

最後に、語法・表現を体系的に扱った著書を3冊紹介する。藤井俊博『今昔物語集の表現形成』(和泉書院, 2003.10)は、今昔物語集の表現形成の過程や文章の創造性を考察し、今昔の表現には視点の変化を利用した「非けり」叙述や、視点を固定した慣用表現のあることを述べる。鈴木丹士郎『近世文語の研究』(東京堂出版, 2003.9)は、近世文語文法と平安文法とのくい違いをテーマにして、同じ馬琴の読本でもサ行下二段連用形に「一せ」と「一し」の不統一があるなど複雑な一面を指摘する。田中章夫『近代日本語の語彙と語法』(東京堂出版, 2002.9)は、否定条件が先行する種々の二重否定表現について、江戸から近・現代までの変化を方言を視野に入れながら考察する。

7. 結び

以上、理論と実証の観点から展望してきたが、実証に比重を置いた論考でも理論的説明を試みるものが多く、理論に比重を置いた論考でも確かな実証に基づくものが多かった。実証をふまえた理論化が着実に進展していることを実感した。これからは文法史を広く見渡した、理論の総合化が課題とされるであろう。また、「人間」の観点については小池清治にも主張があるが(前掲書P156)、理論化にいたるまでには「人間」と「文法」を結びつける多くの具体的事実の実証が必要である。

この2年間に筆者の予想を超える数の著書・論文が刊行されており、紙幅の都合からすぐれた論考の多くを割愛せざるをえなかった。筆者の不勉強から趣旨を十分理解しないままの妄言もあったかもしれない。あわせてご寛恕を乞う次第である。